

田島弥平と清涼育

田島弥平（1822～1898年）は、1800年代後半の日本の養蚕業における重要人物である。彼は、蚕の生育法である清涼育を作ったことで最もよく知られている。換気を改善するために高窓を設けたこの生育法は、1863年に初めて試験が行われ、同年、彼は田島弥平養蚕場を作った。弥平の設計は、以降の10年において、養蚕家屋建設の最も主要なモデルとなる。

弥平が書いた2冊の書籍、養蚕新論（養蚕の新しい理論）とその続編である続養蚕新論（養蚕の新しい理論の続き）により、日本中に彼の教えが広まった。1873年には、弥平は蚕種の販売により経済的成功を収めていた。さらに彼は、1879年から1882年にかけて複数回、イタリアの養蚕農家に直接販売すべく、蚕種を持って現地に渡航した。

1860年代から1870年代にかけて、ヨーロッパの主要な絹生産国であるフランス、イタリアは2つの病気に見舞われ、蚕の数はほぼ壊滅的に減少していた。微粒子病（コショウ病）は、寄生性の真菌により引き起こされる病気で、この菌により蚕は繭を作ることができなくなる。また、軟化病は、蚕を衰弱、死滅させる病気である。ヨーロッパ中で蚕種の価格が急騰し、横浜の絹市場において生糸と蚕種の需要が高まっていた。この需要により、弥平やその他多くの関係者、そして日本政府までが、富を獲得した。